

日付:2016年5月22日／聖書:ヨハネの黙示録20:1～15

説教:「イエスの証しと神の言葉のために」

ナチ政権の時代、多くのドイツ・キリスト教会は、普通に礼拝を行っていた。ヒトラー独裁政権が戦争を起こして行く時も、教会は余り批判的な声は挙げなかった。ナチ政権が、ユダヤ人を迫害する時も教会は余り批判的な声は挙げなかった。教会は、経済的豊かさの中で、政治に対する批判が遠のいてしまうという実態があったのである。

当時、一人の神学者がドイツ教会に宛てた手紙がある。「ドイツのキリスト者に対しても、ドイツ国民全体に対しても、以下のことを証しする責務があるのは教会なのです。すなわち、君たちのやっていることは、良くない！君たちは、誤っている！このようなヒトラーと手を切れ！まったくヒトラーの戦争に過ぎないこの戦争から手を引け！まだ間に合う間に立ち返れ！…なぜ、世界教会運動の代表者と組織とは、この数年、またさらに致命的な展開のあった昨年夏<戦争直前>と秋に、あたかもイエス・キリストから預言者としての職責を委ねられていないかのように、あたかも教会の見張り人としての勤めがないかのように、押し黙り、外交的手腕を表さなかったのか」うんぬん…と続く。教会はその教会としての職責を見失っていたことを問われる。もちろん、少数ではあるが時の政権に立ち向かう教会、キリスト者は居たわけだが…。

黙示録での「殉教」は、ただ単に「踏みえ」的なものとして考えるのではなく、教会が「イエスの証しと神の言葉のために」あり続けたことが記されている。教会が「イエスの証しと神の言葉のために」あるとは、イエスが語られた「愛すること」「平和をつくりだすこと」「正義を行うこと」…そういうことを教会は、イエスから委ねられているということ。教会がイエス・キリストを現して行くということが職責としてある。聖書の時代の教会が、そのような教会のあり方に立っていたからこそ、今、私たちはキリスト教会に与ることが出来ているわけだ。そして教会は、今もなお問われている。「イエスの証しと神の言葉のために」教会は立っているのかと。

先日起きた「元兵士による女性殺害事件」は、余りにも悲しく憤りを覚える事件だ。沖縄に軍事基地がある限り、このような事件は起こり続ける。明日、ゲート前ゴスペルでは、彼女の死を悼み、追悼の時を持つ…。そしてまた、教会は問われたい。「イエスの証しと神の言葉のために」教会は何をするのかと。教会の職責は、悼みを覚えるだけではあるまいと…。(神谷)